

原 著

統合保育場における 言語遅滞をもつ精神遅滞幼児の交友関係

本保恭子¹⁾ 佐久川肇²⁾

ノートルダム清心女子大学 家政学部 児童学科¹⁾

川崎医療福祉大学 医療福祉学部 医療福祉学科²⁾

(平成5年4月15日受理)

The Influence of Integrated Early Childhood Education on
Developmentally Disabled Infants with Speech Problems

Kyoko MOTOYASU¹⁾ and Hajime SAKUGAWA²⁾

Department of Child Welfare

Faculty of Home Economics

Notre Dame Seishin University¹⁾

Okayama, 700, Japan

Department of Medical Social Work

Faculty of Medical Welfare

Kawasaki University of Medical Welfare²⁾

Kurashiki, 701-01, Japan

(Accepted Apr. 15, 1993)

Key words : developmentally disabled infant, speech problems, social development,
integrated early childhood education

Abstract

One purpose of early childhood integration is to strengthen social development without distinguishing between those children who are “developmentally” disabled and those who are not. It has been indicated that verbal communication has an important role in the social developmental process.

In the study, two developmentally-disabled infants with different speech problems were studied for six months. The influence of children with standard speech development on the “developmentally disabled” subjects’ social development was studied.

As a result, subject A, whose speech development was mildly delayed, advanced in both speech and social development. Subject B, however, showed no advancement.

The stated theory is that a “developmentally-disabled” child’s social and verbal

development will improve when the child is integrated with those children whose social and verbal skills develop at an age-appropriate level. Therefore, the positive result of subject A proves this theory.

However, subject A was somewhat isolated from other infants because of his slaver. The negative results from subject B are a result of his autistic behavior, i.e., indifference to other infants, echolalia, perseveration. So it appears that the health impression and the specific "developmental disability", i.e. Downs Syndrome, autism, etc., are important factors in the social developmental process.

要 約

統合保育の目的の一つとして、障害児と健常児が共に生活していくことのできる人間性を形成することがあげられる。この人間関係の基礎となる交友関係の発達に、言語が重要な役割を果たすことがこれまでに指摘されている。そこで、著者らは言語発達程度が異なる2名の精神遅滞幼児を半年間にわたり観察し、交友関係成立過程に言語遅滞の程度がどのような影響を及ぼすかを検討した。

その結果、言語遅滞が軽度であるA児は、遊戯行動・対人関係・言語発達のいずれにおいても進歩が認められ、交友関係の成立もみられた。一方、言語遅滞がA児に比し重度であるB児は、遊戯行動・対人関係・言語発達においてA児のような著しい進歩はみられず、交友関係の発達もみられなかった。このことから、言語能力が交友関係の発達に重要な役割を果たしていることを再確認した。遊戯行動・対人関係・言語発達は、互いに関連し合い、良循環を繰り返しながら発展していく。A児において、この3分野が同時に発達したのは、言語能力が比較的高いために対人関係が円満になり、遊戯行動も活発になっていくといったように、3分野の間に良循環が成立したためであり、B児は言語遅滞が著しいために良循環が成立しなかったと考えられた。

しかし、A児の場合、流涎（よだれ）があるために他の幼児から多くの排斥を受け、これがA児の交友関係を阻害していた。B児は、他児への無関心・反響言語・こだわり行動などの自閉症児特有の行動を示す精神遅滞児であり、この行動特性がB児の交友関係不成立を助長していた。このように、精神遅滞児の衛生面での印象や、自閉といった生来的な行動特性なども精神遅滞児の交友関係の発達を規定する要因の一つといえよう。

緒 言

統合保育の目的の一つとして、障害児と健常児が共に生活していくことのできる人間性を形成することがあげられる。この人間関係の基礎となる交友関係の発達に、言語が重要な役割を果たすことがこれまでに指摘されている。今まで著者らは軽度精神遅滞幼児の半年間の統合保育の観察により、対象児の活動が徐々に活発になったとはいうものの、友だちと一緒に遊んだり、自ら積極的に仲間に加わるまでには至らなかったこと、そして、その交友関係不成立の背

景には、相互コミュニケーション欠如の問題があり、言語発達遅滞と精神遅滞の行動特徴の2つの要因がコミュニケーション能力を規定していることを報告した¹⁻⁴⁾。

そこで、本研究では、言語発達程度が異なる2名の精神遅滞幼児を半年間にわたり観察し、交友関係成立過程に言語遅滞の程度がどのような影響を及ぼすかを検討した。

方 法

1. 対 象

生活年齢5歳4か月（観察開始時）の軽度発

達遅滞男児(以下A児とする)、生活年齢5歳11か月(観察開始時)の軽度発達遅滞男児(以下B児とする)2名を対象とした。WPPSI 発達検査の結果、A児はIQ47, VIQ(言語性IQ)58, PIQ(動作性IQ)54, B児はIQ60, VIQ判定不能, PIQ97, ITPA検査による言語学習年齢は、A児は3歳0か月, B児は2歳11か月である。観察時、両対象ともに岡山市の障害児保育指定園で2年目の保育期間中であった。

2. 手続き

自由遊び場面における両対象児の遊戯行動、対人関係、発語の観察を行い、行動分析表に記入した。この行動分析表は、Bijouら⁹⁾による幼児の社会的行動観察記録をもとに行動目録を定め、著者らが作成したものである。観察は、1992年3月から10月まで週1回、合計20回行われた。1回の観察時間は、10分であった。

3. 資料の整理

両対象児の行動の一分間を15秒単位4場面に分け、10分間で40場面の記録を行った。観察の記録を行動目録により数値化し、時間経過に伴う両対象児の遊戯行動、対人関係、発語の変化を分析した。行動目録は、遊戯行動・対人関係についてはそれぞれ6項目の下位項目に分類されており、発語を含め合計13項目からなっている。

結 果

1. 遊戯行動

図1・2はA児・B児それぞれの遊戯行動を6項目に分類し、10分間40場面の行動を示したものである。

A児は、観察初期には、初期人気テレビ番組の物真似などの「一人遊び」が多くみられたが、次第に他児との遊びを期待した接近しての遊び、いわゆる「平行遊び」へと発展し、さらに後半になると、他児と一緒に遊ぶけれども依然として集団としての遊びには発展しない「連合遊び」が増加した。A児の場合、年少の幼児に自発的にかかわる遊びが多くみられた。また、初期は断続的に行われていた「連合遊び」が徐々に拳銃ごっこなどといった連続的な遊びへと変化した。14回・18回の観察では、他児と互いに協力

しあって遊ぶ「共同遊び」もみられた。

B児の遊戯行動には、全体を通して「一人遊び」と「平行遊び」が多く、終始これらの遊びが繰り返されていた。初期の頃の「一人遊び」は、物を投げて拾いに行くなどという繰り返し遊びや砂遊びなどの静的な遊びが多かった。後半になると、遊具を介しての積極的な遊びが多くみられるようになった。全体を通して「連合遊び」も数回みられたが、A児のように自発的にかかわりによるものはほとんどみられず、他児からのかかわりに応じて始まるものがほとんどであった。「共同遊び」は一度もみられなかった。

2. 対人関係

A児・B児それぞれの対人関係を、正のかかわり(注意、不快・訴え、かかわり、共同活動、援助)の5項目、負のかかわり(受身、無為、一人行動、無反応、拒否、攻撃)の6項目に分類し図3に示した。

A児は、全体的に負の「一人行動」が多かったが、14回以降からは正の「共同遊び」が増加し、正と負のかかわりの回数が逆転していた。A児の場合、共同活動は年少児を相手としたものが多かったが、同年齢の幼児への自発的なかかわりも回を追うごとに増えていた。負の「攻撃」の場面が6回までみられていたが、ふざけや相手の気を引こうとするものであり相手を嫌って攻撃するといったものではなかった。

B児は、全体的に負のかかわりが多く、20回中14回は「一人行動」の割合が50%を越えていた。また、何もしない「無為」の状態は11回以降特に増加していた。しかし、正のかかわりも8回以降わずかに増加していた。「共同活動」の内容をみると、前半は相手の働きかけにより活動が始まる場合がほとんどであったが、後半はB児からの働きかけの場面もみられた。また、「かかわり」の対象も前半は保育士が中心であったが、次第に女児、そして男児へと広がっていた。

観察の回数を重ねるにしたがい、A児は正のかかわりが増加したのに対し、B児についてはあまり変化がみられず、後半になる程A児とB児の差は顕著になった。

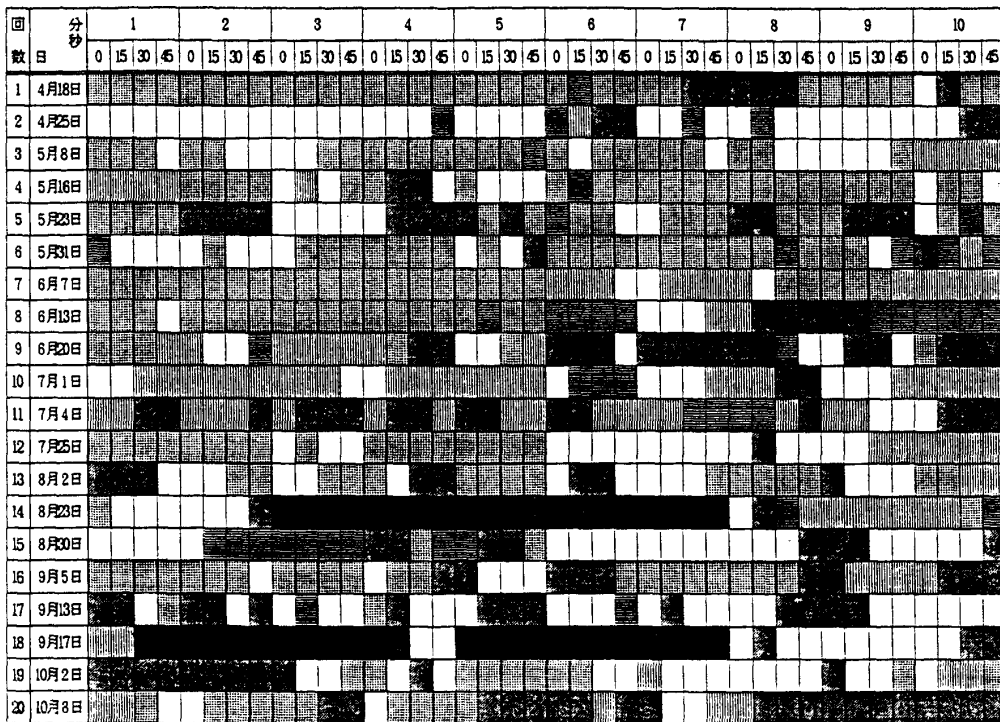


図1 A児の遊戯行動

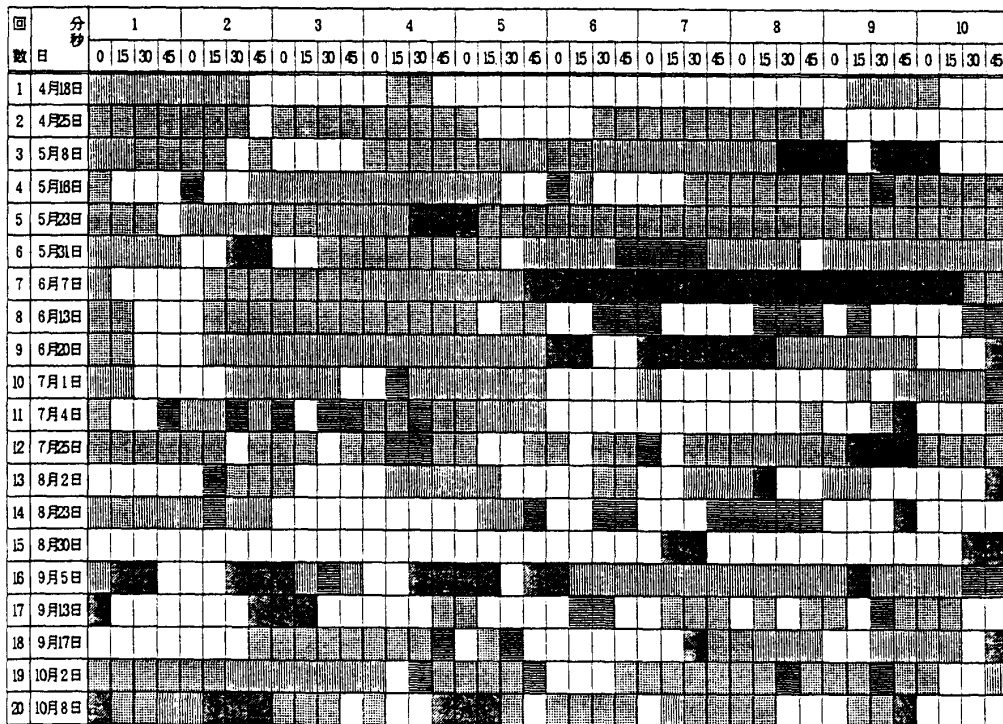
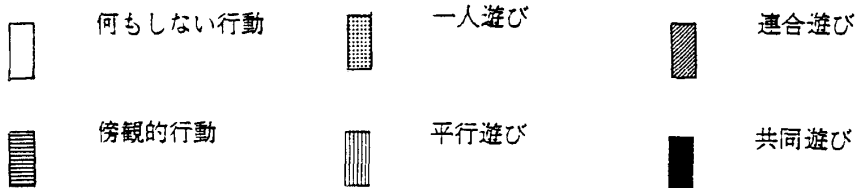


図2 B児の遊戯行動



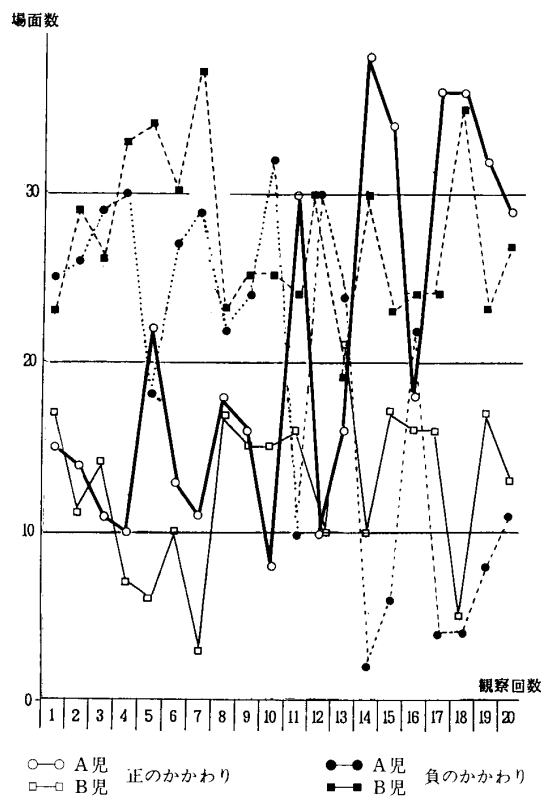


図3 対人関係の変化

3. 発 語

図4・5はA児・B児それぞれの発言内容を6項目に分類し、10分間40場面の発語を示したものである。

20回の行動観察で、A児の発語がみられたのは800場面中141場面であった。その内容は、初期は「独語」が多く、人気テレビ番組のヒーローの物真似をすることによって他者の注目を集めようとするものであった。「報告」は「僕、昨日動物園に行ったんだよ」などで、経験の報告ではあるものの会話が成立するまでには至っていなかった。後半になると、感じたことも言葉で表現できるようになった。また、初期の話相手は、観察者や保母が中心であったが、後半は他児との会話も増加してきた。このように発言内容や対象が変化してきたことに伴い、初期には断片的であった報告も次第に連続するようになり、10分間に占める発語回数も増加した。

B児の場合、発語がみられたのは800場面中97場面であった。その内容は、全体を通じて「集団内独語」が多く、「今日はストッキングをはい

ているの」と誰にでも繰り返し尋ねるものが多かった。これは、観察期間を通して終始聞かれた発語であった。また、自分では解決できない事態が起こると奇声をあげることもあった。「報告」はしばしばみられたが、その回数は増加しなかった。A児は過去の経験についての報告が可能であるのに対し、B児は現在の状態の報告に留まっていた。

考 察

- 1. 精神遅滞幼児の交友関係を妨げる要因
- 1) 言語遅滞が交友関係成立に与える影響

観察の結果、言語遅滞が軽度であるA児は、遊戯行動・対人関係・言語発達のいずれにおいても進歩が認められ、交友関係の成立もみられた。一方、言語遅滞がA児に比し重度であるB児は、遊戯行動・対人関係・言語発達においてA児のような著しい進歩はみられず、交友関係の発達もみられなかった。このことから、言語能力が交友関係の発達に重要な役割を果たしていることを再確認した。

また、言語発達は、遊戯行動・対人関係に重要な役割を果たし、交友関係成立に深くかかわっていることも確認した。この3分野は、互いに関連し合い、よい循環を繰り返しながら発展していく。つまり、遊びが発達すれば対人関係が豊かになり、対人関係が豊かになればコミュニケーション機会が増え言語も発達して行く。そして、言語が発達すれば対人関係も発達するのである。A児において、この3分野が同時に発達したのは、言語能力が比較的高いために対人関係が円満になり、遊戯行動も活発になっていくといったように、3分野の間に良循環が成立したためであると思われる。一方、B児は言語遅滞が著しいために対人関係・遊戯行動ともに進歩がみられず、A児のような良循環が成立しなかったと考えられた。

遊戯行動・対人関係・言語発達の3つの中の1つでもその発達が阻害されるならば良循環は成立せず、進歩の程度も減少するといえよう。

- 2) 精神遅滞幼児の不潔な外観が交友関係成立に与える影響








観察の過程で、A児の属するクラスの幼児に

回数	日	1				2				3				4				5				6				7				8				9				10			
		0	15	30	45	0	15	30	45	0	15	30	45	0	15	30	45	0	15	30	45	0	15	30	45	0	15	30	45	0	15	30	45	0	15	30	45	0	15	30	45
1	4月18日																																								
2	4月25日																																								
3	5月8日																																								
4	5月16日																																								
5	5月23日																																								
6	5月31日																																								
7	6月7日																																								
8	6月13日																																								
9	6月20日																																								
10	7月1日																																								
11	7月4日																																								
12	7月25日																																								
13	8月2日																																								
14	8月23日																																								
15	8月30日																																								
16	9月5日																																								
17	9月13日																																								
18	9月17日																																								
19	10月2日																																								
20	10月8日																																								

図4 10分間40場面におけるA児の発言内容

回数	日	1				2				3				4				5				6				7				8				9				10			
		0	15	30	45	0	15	30	45	0	15	30	45	0	15	30	45	0	15	30	45	0	15	30	45	0	15	30	45	0	15	30	45	0	15	30	45	0	15	30	45
1	4月18日																																								
2	4月25日																																								
3	5月8日																																								
4	5月16日																																								
5	5月23日																																								
6	5月31日																																								
7	6月7日																																								
8	6月13日																																								
9	6月20日																																								
10	7月1日																																								
11	7月4日																																								
12	7月25日																																								
13	8月2日																																								
14	8月23日																																								
15	8月30日																																								
16	9月5日																																								
17	9月13日																																								
18	9月17日																																								
19	10月2日																																								
20	10月8日																																								

図5 10分間40場面におけるB児の発言内容

	報告		命令		独語		発語なし
	非難		反復		集団内独語		

A児に対する印象を聞いたところ、A児は流涎（よだれ）という外見的要因によって他の幼児から嫌われていることが明らかとなった。島田ら⁶⁾は、幼児の交友関係成立の要因についての調査の中で、男女ともに外見的要因から友だちを選ぶ傾向があることを指摘している。幼児は、概して「好き」「嫌い」の判断を単純に個人の外見から判断する傾向があるのである。このように、精神遅滞幼児の不潔な外観は、交友関係の発達を妨げる要因の一つといえる。したがって、A児の流涎が改善されると、A児に対する排斥は減少し、交友関係の発達も期待できると考えられる。

3) 精神遅滞幼児の自閉的傾向が交友関係に与える影響

B児は、他児への無関心・反響言語・同じ動作を繰り返すこだわり行動などの自閉症児特有の行動を示す精神遅滞児である。一般に自閉症児は、他児への関心が低いことや、他児からのかかわりが少ないことのためにコミュニケーション能力に障害がある⁷⁾とされている。一方他児の立場からすると、自閉症児は他児からの積極的な働きかけに対しても反応は乏しく、不可解な行動も多いためかかわりが疎遠になるのである。このB児の行動特性が交友関係不成立を助長していたと考えられた。このように、自閉といった生来的な行動特性も精神遅滞児の交友関係の発達を規定する要因の一つといえよう。

また、B児には自閉的特性以外に、大人に対する甘えが多いという特徴がみられた。これは、過保護的な親の養育態度による二次的な特性であると考えられるが、このような養育環境がB児の受動的態度を助長しており、この受動的態度が交友関係成立の機会を減少させていると思われる。

このように、自閉傾向のある精神遅滞幼児は本来の知的能力の低さとコミュニケーション障害から交友関係成立が困難となるだけでなく、環境要因から受けた歪みも交友関係の歪みを助長している。したがって、統合保育場面において、自閉的精神遅滞幼児の場合は、特に他児とのかかわりのきっかけをいかに工夫していくかが重要なポイントになるであろう。

2. 軽度精神遅滞幼児および自閉傾向のある精神遅滞幼児における交友関係の改善

1) A児の場合

ITPA 検査からA児の言語障害の特徴をみると、見たり聞いたりしたものを認知する受容過程と、言葉・身振り・動作で考えを表現する表現過程には問題がみられず、各々の要素を結びつける連合過程に問題があることがわかった。連合過程とは、与えられた刺激と、今まで見たり聞いたりしたもの、あるいはかつて行ったものを、意味をなすように関連づける内的操作の過程のことである。A児の場合、物事の成り行きや因果関係を推理判断し、抽象する能力に問題があるため、言語能力が全体的に遅滞したと思われた。よって、A児の言語能力を改善し、交友関係を発展させていくためには、論理的思考の発達を促すことが大切である。この論理的思考は、幼児の遊びの中でも、特に「共同遊び」において必要とされる。したがって、A児の論理的思考は「共同遊び」を通して伸ばしていくことが有効である。A児は、他児と遊びたいという意欲を持っているので、保母が中心となり「共同遊び」の場を設定していくことにより、遊びへの参加は可能となると思われる。しかし、「共同遊び」の中で自ら推理判断していくことは困難であるため、保母はA児の自主性を尊重しつつ、A児にとって困難であると思われる場面や、他児がA児を排除した場面のみ適宜援助していくなどの配慮が必要であろう。

また、A児は流涎という外見的要因により交友関係成立が妨げられていた。A児にとって流涎を止めることは不可能であるが、保母の促しにより流涎をふくことは可能である。A児に流涎への対応の改善を図っていくことが望まれる。また、健常児に対しても、流涎があってもA児と仲良くするように繰り返し指導する必要がある。このように、障害児と健常児の両者にそれぞれの指導を徹底していくことにより、交友関係の改善が図れるといえよう。

2) B児の場合

自閉傾向を持つ精神遅滞児は、特有の認知障害および言語障害を持つと言われている。それらの障害のために、関係の把握や抽象能力、時

間系列情報の処理能力が低く、話言葉の理解に困難があり、そのため二次的に対人関係の障害が生ずる。B児は、認知障害のために自分がどのような状況に置かれているのかを把握することができず、集団行動がとれていない場面が多くみられた。このような場合、保母は今から何をするのか、今どのような状況にあるのかなどB児に対して特別にわかりやすく説明を加えていくことが必要であろう。また、B児が過去のことを考えたり将来のことを予測できないことは、時間系列情報の処理能力の低さを示している。この改善として、日常生活場面において、保母が「昨日どこへいったの」などと積極的に問いかけて、過去の楽しかった出来事を思い出すきっかけを持たせていくことは、第一段階の方法といえよう。

また、B児の反響言語は、他児や観察者に「今日はストッキングをはいているの」と尋ねるという形で表れていた。石部⁸⁾は、「反響言語は、自閉症児が人にかかわりを求める時のサインである」としている。したがって、B児の場合も他児や観察者にかかわりを求めていたものと思われる。反響言語は、その状況に適さない言葉であると判断するならば、当然禁止していくことが望ましいが、人に対するかかわりの表れとして受け入れることも忘れてはならないだろう。そして、これを会話を発展させる手段とすることも可能であろう。

この他に、B児は「かごめかごめ」など同年齢の健常児にとっては次元の低い遊びを好んだ。精神遅滞児の場合、遊びの対象を常に同年齢幼児に求めるのではなく、知的発達レベルが同程度の幼児に求めることも大切である。

結 語

著者らは言語発達程度が異なる2名の精神遅滞幼児を半年間にわたり観察し、交友関係成立過程に言語遅滞の程度がどのような影響を及ぼすかを検討した。

その結果、言語遅滞が軽度であるA児は、遊戯行動・対人関係・言語発達のいずれにおいても進歩が認められ、交友関係の成立もみられた。一方、言語遅滞がA児に比し重度であるB児は、遊戯行動・対人関係・言語発達においてA児のような著しい進歩はみられず、交友関係の発達もみられなかった。このことから、言語能力が交友関係の発達に重要な役割を果たしていることを再確認した。遊戯行動・対人関係・言語発達は、互いに関連し合い、よい循環を繰り返しながら発展していく、A児において、この3分野が同時に発達したのは、言語能力が比較的高いために対人関係が円満になり、遊戯行動も活発になっていくといったように、3分野の間に良循環が成立したためであり、B児は言語遅滞が著しいために良循環が成立しなかったと考えられた。

しかし、A児の場合、流涎（よだれ）があるために他の幼児から多くの排斥を受け、これがA児の交友関係を阻害していた。B児は、他児への無関心・反響言語・こだわり行動などの自閉症児特有の行動を示す精神遅滞児であり、この行動特性がB児の交友関係不成立を助長していた。このように、精神遅滞児の衛生面での印象や、自閉といった生来的な行動特性なども精神遅滞児の交友関係の発達を規定する要因の一つといえよう。

文 献

- 1) 本保恭子, 佐藤晶子, 佐久川肇 (1991) 統合保育における障害児の遊びと交友関係. ノートルダム清心女子大学児童臨床研究年報, 第3集, 21-26.
- 2) 本保恭子, 佐久川肇, 奥山清子 (1991) 統合保育における障害児の遊びと交友関係. 日本幼少児健康教育学会第9回大会 発表抄録集, 16.
- 3) 本保恭子, 奥山清子, 佐久川肇 (1992) 精神遅滞幼児の言語能力と交友関係. 日本幼少児健康教育学会第10回大会 発表抄録集, 20.
- 4) 本保恭子, 佐久川肇, 奥山清子 (1993) 統合保育における障害児の遊びと交友関係 (2). ノートルダム清

心女子大学児童臨床研究年報，第5集，現在印刷中

- 5) Bijou SW, Peterson RF, Harris FR, Allen KE and Johnston MS (1969) Methodology for experimental studies of young children in natural settings. *Psychological Research*, **19**, 177—210.
- 6) 島田俊秀 (1974) 乳幼児心理学，初版，川島書店，東京，pp. 105.
- 7) 山口 薫 (1988) 精神遅滞児の病理・心理・教育，初版，東京大学出版会，東京，pp. 91.
- 8) 石部元雄 (1986) 障害乳幼児の発達と指導，初版，福村出版株式会社，東京，pp. 100.